

# 論理的であることの限界とこれからの国語教育

国際日本学部 日本文化学科 澤口 哲弥

2020年の春、神奈川大学に赴任しました。国語教育学を専門とし、現在はおもにクリティカル・リーディングの指導理論やそのカリキュラム開発の研究をしています。

赴任と同時に蔓延した新型コロナウイルスでしたが、慣れない地への引越と相まって、仕事に生活に右往左往する毎日でした。

さて、このコロナですが、数ヶ月の間にさまざまな社会現象を生みました。その中で私が注目していたのが、いわゆる「自主警察」の跋扈です。外出自粛時に営業を続ける商店にやめろという張り紙をしたり、県外ナンバーのクルマに嫌がらせをしたりという一連の行為です。このことはSNS上での発言など、あらゆるところで目にする機会がありました。

こういう行為は、やっている方々はだまじめに正しいと思ってやっています。なぜなら、彼らの中に筋道のはっきりした論理があるからです。極限の状況にあるなかで、生き延びるための論理を見だし、正当化し、それを他者に強要するのです。往々にしてそういう人たちは攻撃対象とする人びとの背景、文脈を考慮しようとはしません。

この文章を書いている今も、駅にとめてあった無施錠の自転車38台の鍵をすべて抜き、捨てたという事件が報じられています。「鍵をかけないのはマナーが悪い」という言い分（論理）のようです。理解したい行動ですが、しかし、このような自分特有の論理で正義をかざすような行動原理は、少なからず私たちの中に隠れているのかもしれない。

私の専門は先に述べたように国語教育ですが、クリティカル・リーディングという多角的かつ慎重にテキストを読む理論の見地からこの現象を眺めると、ある一つの気づきに逢着します。それは、論理的な正しさを求めることは、決して人間を幸福にするための妙薬ではないということです。

巷では「論理的思考力」「批判的思考力」が、近年、必要なスキルとして注目されています。新しい学習指導要領でも「批判的思考」の必要性が語られるようになりました。企業などの研修会でもこのような資質の向上のためのセミナーなどが開催されています。ものごとのつじつまが合うように考え、問題を見だし、解決策を示し、それらを的確かつ創造的に言語化すること、このような資質や技能は、さまざまな職種において求められるようになっていきます。

これらの理論は、哲学的なアプローチを除けば、おおむね米国でのCritical Thinkingの知見をもとに構築されてきました。合理的なあり方を求めることは、情報にあふれる混沌とした社会にあつて、必要な思考法と言えます。しかし、現代社会を生き抜くには必要な資質や技能であるとも言えます。しかし、そういった合理性ばかりが前面に出ると、わかりやすい表面的な正当性に踊らされ、間違っていることでも正しいと思ひ込む危険性がありますし、個々の正論ばかりがまかり通ればごくしくしくした争いの絶えない社会になってしまいます。合理を至上とすると、文脈を配慮するという潤滑油の価値を忘れるからです。

私たちにはいま、そのような論理的に思考し合理を求めることの意義を知りながらも、背景にあるイデオロギーやコンテキスト、言い換えれば、テキストに隠れているさまざまなねらいや事情を読み解いていく態度や技能が必要なのではないかと考えます。テキストに現れるレトリックから背景に隠れた思想を読んだり、テキストがどのような前提から書かれているかを検討したり、誰に向けて書かれたテキストなのかを推し量ったりなど、いわば「見えない論理」を、テキストから読みとるという態度や技能です。

教育の世界に目を向けると、国語教育では、従来、文学的文章を読む場合

であれば、いかに上手く名作を鑑賞するか、また説明的文章を読む場合であれば、いかに効率よく筆者の主張を把握するかに学習の主眼が置かれてきました。教科書のテキストは権威あるものとして位置づけられ、ときには裏をのぞいたり、ひっくり返したりという前提を覆すような読み方はされてこなかったのです。新しい学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力等」という資質・能力や、それを育む形態としての「主体的・対話的で深い学び」を求められるようになりましたが、それでも、その文脈からは、先に述べた「見えない論理」を読んでいく学習者を育てるというような気概は伝わってこないように思います。

このような現状、問題意識から、博士論文（『国語科クリティカル・リーディングの研究』2018）では、対象をしつかり見極め、多角的な見地から推論、解釈をし、既存の社会の修正を図ることができると考えることができるとするクリティカル・リーディングの指導理論を構築しようと考えました。



『国語科クリティカル・リーディングの研究』（溪水社、2019）

論文で援用したのは、クリティカル・リテラシーの理論を基礎にした第二言語学習論です。ことばの背景に隠されたパワーを看破することや、なぜそのような表現が選択されたのかを考え多角的に検討する理論です。そこには、論理的なつじつまを検討するクリティカル・シンキングの理論の、社会的・文化的文脈に依存しようとしないう「弱さ」を補う魅力がありました。なかでも注目したのは、ロンドン大学で長らく教鞭を執ったC.WallaceのCritical Reading理論です。Wallaceは、フレイレの批判的教育学、フェアクロフの批判的言語意識、ハーバーマスのコミュニケーション論、ハリデーの選択体系機能文法などを背景理論としながら、学習者の多用な社会的・文化的背景を活かしながら、テキストの既存の読み方を再定義・再構成する実践理論を編み出していました。論文や著書を多く読みましたが、直接聞いてみたいこともあり、ロンドンの先生を訪ね、インタビューもしました。

2016年3月の短い春休みを使つてのロンドンでした。研究の成果は科研費の出版助成を受け、『国語科クリティカル・リーディングの研究』（溪水社2019）として出版しています。

国語科クリティカル・リーディングでは、テキストを読むときの指導を「読解プロセス」と「フレイムワーク」に分けて整理しました。「読解プロセス」では、「理解する」「推論する」「評価する」という読みの流れを示しました。もう一つの「フレイムワーク」では、テキストの背景にある価値観や思想を読む「イデオロギー／コンテキスト」、テキストの書き方の戦略を読む「レトリック」、テキストの定義づけを検討しその再定義・再構成を図る「定義・構成」、テキストがどこからやってきたのか、また誰に向けて書かれたのかを考える「想定読者」、そして、テキストは何を伝えようとしたかを考える「トピック」の5つのねらいを示しました。論文では、実際に小中高の教科書教材の学習の手引きを再構成し、実践することも試みています。

読むということはどういうことなのか。そして国語科クリティカル・リーディングを現場で実践するにはどのようなカリキュラムを構築すべきなのか。これらは、当面の自身にとつての大きな研究テーマです。読むことが、既存の社会・文化を俯瞰的に捉え、それを再構成していける知性と思慮力を蓄えるための行為となることを目指したいと考えています。そして、「読める」人を少しでも多くしていくことで、政治や経済、文化的なさまざまな状況を、よりよい軌道に乗せていく原動力にしたいと思っています。



C.Wallace と筆者（2016.3.27）